

問題解決の窓口を紹介 それが民生委員の仕事



前・関市民生児童委員連絡協議会会長
岩瀬結祥さん(79)＝樋渡＝

民生委員は、厚生労働大臣から委嘱を受けてそれぞれの地域で皆さんからの相談に応じ、社会福祉の増進に努めている、無報酬の福祉ボランティア。市内では358人が活動しています。

基本は、住民と行政の橋渡し。行政はさまざまな事業を行っていますが、住民が知らないことも多い。そのはざま、介護保険を利用したいと相談されれば地域包括支援センターを紹介するなど、相談者を専門の窓口まで案内します。

高齢者の孤立を防ぐための活動も行っています。

社会福祉協議会が行っている「緊急連絡カード」作成の実務は、民生委員が担当。一人暮らしの人に▶親族の連絡先▶かかりつけの病院▶近所の支援者の名前▶を聞き取りし、本人、社会福祉協議会、市役所、民生委員が共有するとともに、自宅の目につく場所に置いてもらっています。毎年10月に更新。「災害時一人も見逃さない運動」に取り組む民生委員にとって、2年前の岩手・宮城内陸地震の安否確認にとても役立ちました。

社会福祉協議会が地域の取り組みに助成している「ふれあいサロン」や市の「介護予防教室」は、各地域で運営されていますが、民生委員も深く関わりを持っています。

市内の高齢化率は約30%ですが、介護保険などの福祉サービスを利用しているのはそのうち約18%。元気な高齢者が圧倒的に多いのです。相手の気持ちを考えて感謝と思いやりの心を持ち「お互い様」として過ごすことが、住みよい地域づくりにつながるのではないのでしょうか。



大東町興田地区で配食サービスの配達部分を行っている「ボランティア根っこ会」

「二人暮らしの人が亡くなって、いるのを見つけたこともあるし、利用者に泥棒と間違われたこと

弁当の配達と同時に見守り活動も実施
「ありがとう」がやりがい
ボランティア根っこ会

「二人暮らしの人が亡くなって、いるのを見つけたこともあるし、利用者に泥棒と間違われたこと

も」と振り返る、ボランティア根っこ会の小山英樹会長(70)。同会は、市社会福祉協議会大東支部が市から委託を受けて行っている配食サービスで、興田地区内の利用者への配達をボランティアで担っています。平成9年から活動を開始。現在は週3回、利用者7人への配達を、会員12人が交代で行っています。同会の活動をきっかけに、大東町内で同様のボランティアグループも発足しています。

会員はそろいのベストと帽子、名札を身に付け、弁当を手分けして活動拠点の興田デイサービスセンターをスタート。この日当番の小山耕一さん(65)は3軒を訪れました。利用者に弁当を届け、空の弁当箱を受け取り、利用者に声を掛けて記入票に押印してもらいます。利用者の一人、小上文雄さん



ボランティア根っこ会の小山トヨ子さん(右)、小山英樹会長(中)、小山耕一さん

(83)は妻が施設に入所して一人暮らしになったのを機に、今年からサービスを利用。「3食おかずを作るのは大変なので、1食でも届けてもらおうと。大変ありがたい」と感謝していました。

「昨年、自治会の中で2件もの孤独死が発生。都会のことだと思っていたのに、身近に起こってしまったなんて」。昨年4月から千厩1区自治会長を務める照井秀子さん(63)は、その衝撃を振り返ります。二晩続けて電気がつかないなど、後から考えれば近所での「気づき」もあったものの、発見に結びつけることができず、近所の人たちのショックは大きいものでした。

この悲しい経験から、コミュニティでの見守りを自主防災会による「まごころ交流記録」という形で4月からスタートさせました。

孤独死発生時のショック 乗り越え地域で見守る 「まごころ交流」 千厩1区自治会



上「まごころ交流記録」と名付けて自治会内で見守りの仕組みをつくった千厩1区自治会
下 照井秀子自治会長



地域での 取り組み

無理せずできる「1」から

自主防災組織の立ち上げが1昨年と、千厩町内では一番最後だった同自治会。そんな中、今年2月、「優良自主防災組織」として表彰を受けたことも、見守り活動を始めるいい契機になりました。

202世帯で構成され、市街地から農村地帯までを含みエリアも広く、会員の職業も会社員、農業、商業とさまざまな同自治会。一人暮らしは28世帯、そのうち80歳以上の高齢者の一人暮らしは3軒です。

見守りの内容は、23の班ごとに一人暮らし世帯や高齢者だけの世帯を班長らが週1回は見回って声を掛けようというもの。「文書を配る際、ポストに入れて終わらせずに一声掛ける。それだけでいい」と照井会長。その内容を「まごころ交流記録」に記録し、次の班長に手渡していく輪番制です。最初は抵抗もあったそうですが、「見本の記入シートを作成して自治会内で導入について話し合う中で、住民の意識が変わった」と振り返り、半年たった今は「数年たって全ての世帯が班長を経験すれば、この記録簿

「もっと話がしたい」 自然体で 高齢者同士が自宅を訪問 堤下老人クラブ

「高齢者は話をしたがっている。近所のこと、みんながどうしているのかを知りたいのです」と花泉町油島の堤下老人クラブ(佐藤伍

もいらなくなるはず」と期待を込めます。

ある日、一人で暮らす菅原多喜子さん(80)宅を近所の小野寺清志さん(82)が訪問。清志さんは文書を手渡しながら多喜子さんの体調などを尋ね、その後誘われてお茶飲み。多喜子さん手作りの漬け物などをいただきながら、会話が弾んでいました。

「人はだんだん年をとってくると、一人では生きられないと実感するもの。それぞれの人が無理せず自分で行えることを行っていくことで、見守り見守られて、安全で安心な地域づくりにつながる」と信じています。照井会長の言葉から、ゆるぎない決意が伝わります。



堤下老人クラブ副会長の及川静さん(右)、事務局長の岩瀬淳さん(中)と妻の正子さん

同クラブは、高齢者同士、動ける人が足を悪いなど健康状態によりあまり動けない人を訪問する見守り活動を継続。長年自然体で行っています。

訪問先は、会員だけではありません。長年同じ地域で暮らしてきた者同士、互いのことをよくわか

自治会、老人クラブ、ボランティア団体など、さまざまに行われている地域での取り組みを紹介しします。